

研究主題「感謝の心をもって生活しようとする児童を育てる道徳授業 －地域の人と自分とのかかわりに視点をあてた指導を通して－」

東京都教職員研修センター研修部専門教育向上課
千代田区立千代田小学校 教諭 藤本 禎子

I 研究のねらい

変動の激しい社会においてその影響を受け、子どもたちの心が変化してきていると言われている。社会全体のモラルの低下、家庭・地域の教育力の低下などにより、自己中心的で他を思いやれないというマイナス面も挙げられている。「心の東京革命」においても、次世代を担う子どもたちに対し、親と大人が責任をもって正義感や倫理観、思いやりの心をはぐくみ、人が生きていく上での当然の心得を伝えていくという取組みが行われている。

児童と人とのかかわりの広がりや、家庭、学校、地域、社会と広がっていく。しかし、核家族化が進み、安全とは言い難い現代社会の中で、地域の人とのつながりが薄れてしまったという現状がある。そこで、実際は身近であるのに児童にとって認識が低いとされる地域の人に焦点を当て、感謝の心をもって生活しようとする児童の育成が大切であると考えた。地域の人とのかかわりを通して他者とのかかわりに気付くことが、自分が支えられて生きていくことに対する感謝につながっていくと考えたからである。以上のことから本研究主題および副主題を設定した。

II 研究の内容と方法

1 基礎研究

「地域」と「他者とのかかわり」について

児童の多くは約束や決まり、規則の大切さに対する「意識」をもっているという先行調査結果を受け、それを「行動」に結び付けていく手だてとして、まず人とのかかわりに着目した。

様々な人とのかかわりの中でも、とりわけ地域の人から多くのことを学ぶことができるということから、地域の人と自分とのかかわりに視点をあてることが効果的であると考えた。

「東京都教育ビジョン」地域とは・・・地域の役割とは・・・

地域とは人間関係や社会の中での習慣やルールを学ぶ場であり、子どもたちは地域における様々な体験を通して、豊かな人間関係を築く力や、社会における習慣やルールを身に付けていく

C.H.クーリー（社会心理学）

幼年期の道徳意識を形成する場所（家族、友達などの仲間集団、年長者の地域社会集団）
他者とのコミュニケーションを通じて社会性や道徳意識が生まれ、社会の中の自分を意識して自我を形成する

G.H.ミード（社会心理学）

他者との関係から自己を認識し、より大きな社会における一般化された他者の期待とのかかわりにおいて人はより成熟した自我を確立することになる

門脇厚司（教育社会学）

子どもに「生きる力」や「社会力」を育てるためには他者との相互関係が何より大事である
これらを育む場として地域社会が相応しく、地域における多彩な人々とのかかわりから多くのことを学ぶことができる

「社会力」が発動される下地となるものは、特定の他者への深い理解と熱い共感であり、共感できる他者であれば愛着や信頼感が生まれる。関心 → 愛着 → 信頼感

他者とよりよくかかわろうとする心情を育てるために、支えてくれる人を意識することから始まり、自分はどう行動したらよいかを相手のために考える。そして、互いが気持ちよく過ごすにはどんなことが大切であり、自分にはどんなことができるかということに気持ちを向ける。

地域の人と自分とのかかわりを通して、支えてくれている地域の人に対し意識を向けることにより、他者とのいい関係を築こうとしていくことにつながっていくのではないかと考えた。

2 実践研究

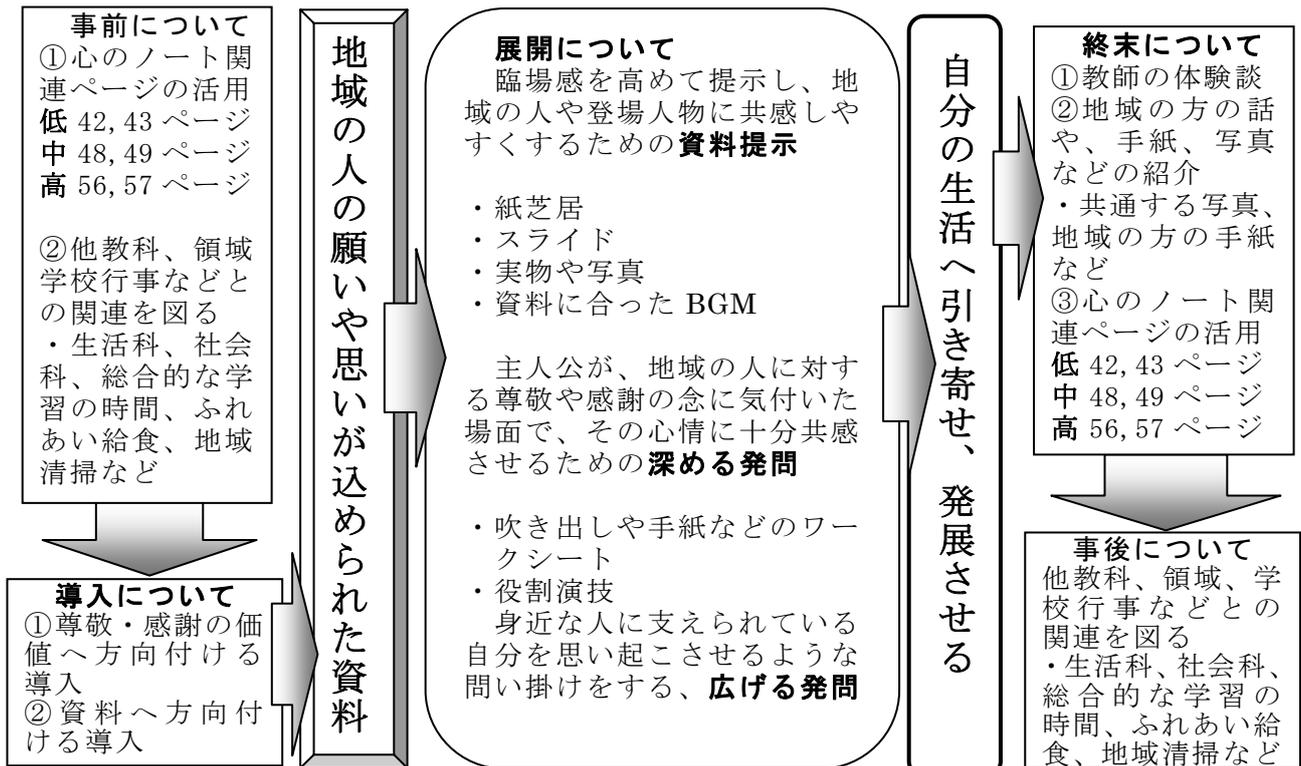
(1) 感謝の心をもって生活しようとする児童に求める姿

尊敬・感謝に関する発達段階に応じたねらいと、感謝の心をもって生活しようとする児童に求める姿について考えた。

	道徳の時間の ねらい	事前	導入	展開	終末	事後
		(関心)		(愛着)	(信頼感)	
低学年	日ごろ世話になっている身近な 地域の人々 に 気付き 感謝する	・地域には、どんな人があるかな。	学校や地域の人に、どなたもありがとうを言っているのかな。	そうだったのか。いつもありがとうございます。いっぱいお手伝いしよう。うれしかったです。	ありがとうが、いっぱいあるね。	・すすんであいさつしよう。 ・これからもがんばろう。
中学年	地域の人々 や高齢者が自分たちの生活を支えてくれていることを 知り 、尊敬や感謝の念をもって接する	・地域の人や、おじいさんおばあさんに、いろいろなことを教えてもらいたい。	どんな人たちに、支えられているのだろう。 家庭で学校で	すごい。偉いなあ。今までありがとうございました。ありがとうございますと伝えたい。昔の人たちが守ってくれたことも大切にしたい。	今の暮らしを支えてくれた、人たちに感謝したい。	・生活を支えてくれたおじいさん、おばあさんたちの、思いを大切にしたい。 ・人を支える人になろう。
高学年	地域の多くの 人々が私たちの生活を支えてくれていることを 理解し 、感謝の気持ちを持ち自分にはできないか考えて行動しようとする	・自分たちの周りの地域の人に、どんなことを支えてもらっているのかを考えてい	毎日の生活を支えている人々について考えてみよう	すごい。見習いたい。大変なことだな。勇気があるな。みんなのために尽くしてくれている。本当にありがとうございます。自分たちにもできることはないだろうか。	支えてくれている人たちの、思いにこたえたい。	・いろいろな人に、支えられて生きているな。 ・自分たちにはできることを、すすんでやろう。

(2) 指導過程の工夫及び具体的手だてについて

地域の人とのかかわり方について深く考えることにより、感謝の気持ちを高め、更に自分自身の経験をじっくりと思い起こすことのできる学習活動の工夫を取り入れることとした。



(3) 資料選択について

地域の人たちの思いや願いが込められた資料から、地域の人たちの支えに気付き、感謝の気持ちが生まれると考え、発達段階に応じ理解を深めていくという視点で資料を選定した。

低学年「ごほうび」(文部省 道徳教育推進指導資料(指導の手引き) 2)

主人公は、夏休みのラジオ体操で地域の方にお世話になっていることに気付く。お世話になっている地域の人への感謝について考える。

中学年「花と緑のまち」(東京都道徳教育郷土資料集 第1集)

主人公は明治時代の地元の高齢者が、町の緑を増やそうと植樹活動を行ってくれたことを示す石碑の由来に関心を向けたことから地域の方の思いや願いを知る。そして尊敬や感謝の念をもち大切にしていこうと考える。

※郷土資料とは、その地域で指導するために開発されたものであるが、本資料には高齢者の思いや願いが込められており、尊敬・感謝の価値について理解しやすいと考え、選定した。

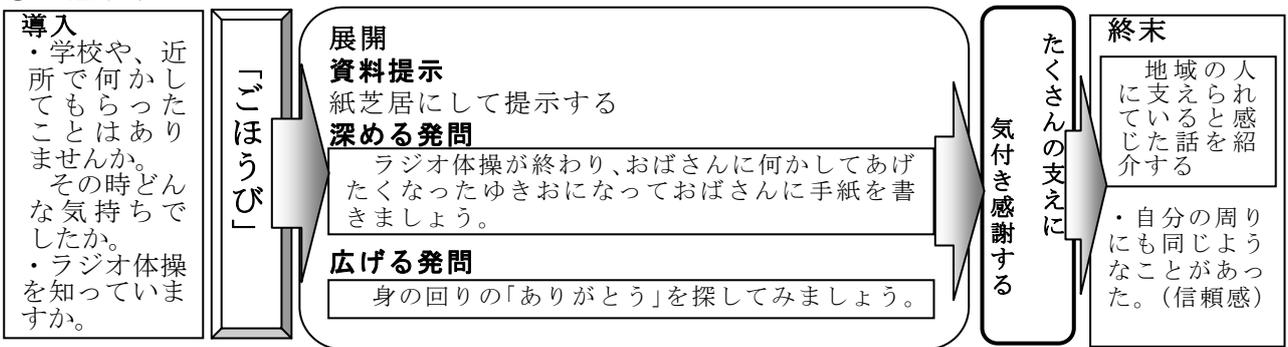
高学年「消防団員の鈴木さん」(自作資料)

主人公は近所で起こった火事をきっかけに、地域の消防団員の苦勞を知り、地域の方が自分たちの生活を支えているということを理解する。その上で尊敬や感謝の気持ちをもち自分にも何かできることはないかと考える。

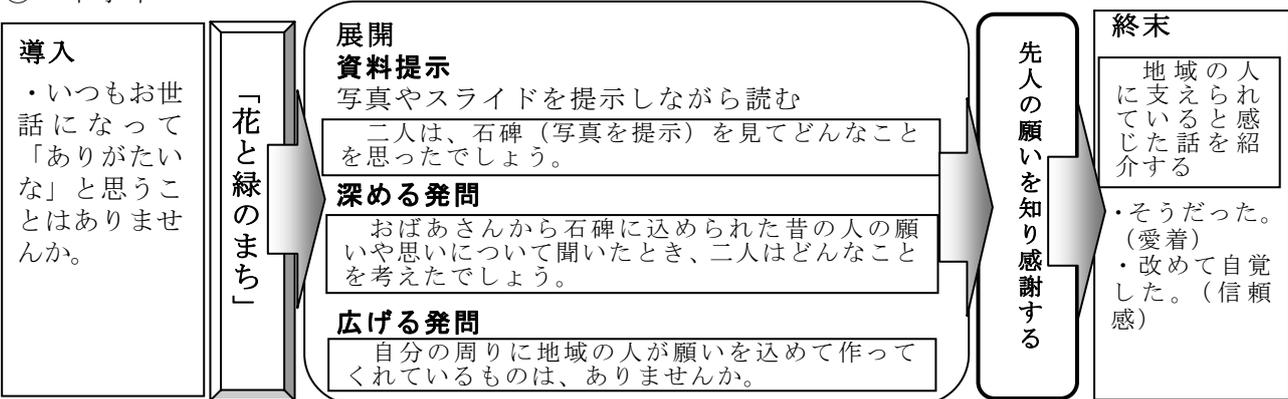
(4) 検証授業について

発達段階を踏まえて指導計画を考え、低学年・中学年・高学年において検証授業を行った。

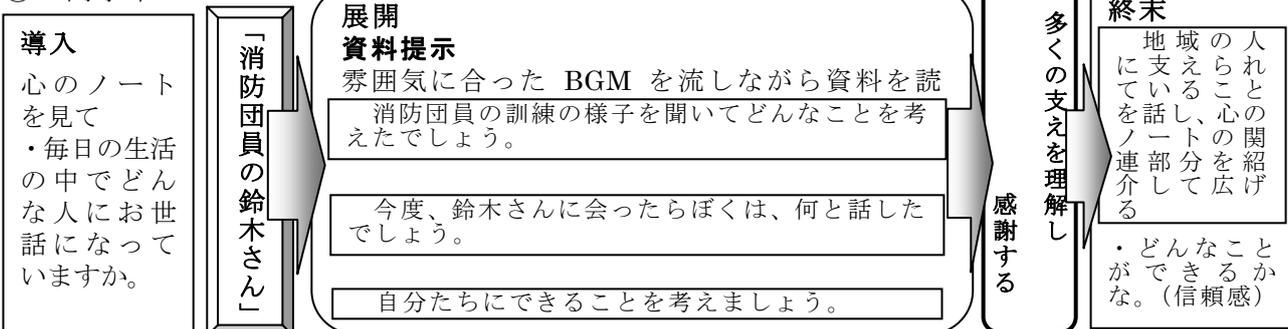
① 低学年



② 中学年



③ 高学年

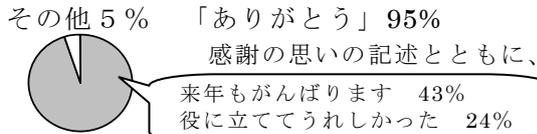


Ⅲ 研究の結果と考察

低学年「ごほうび」の実践より

(対象 2 年生 21 名)

・深める発問における手紙の記述



勤勉・努力や家族愛、郷土愛につながるような内容を児童は手紙に書いていた。

手紙を取り入れたことで、主人公の感謝の気持ちに共感させることができた。また、記述の中には、「**がんばります**」(勤勉・努力)や、「**お手伝いできてうれしかった**」(家族愛・郷土愛)など他の内容項目にかかわる反応も見られた。

・広げる発問における心のノートの活用

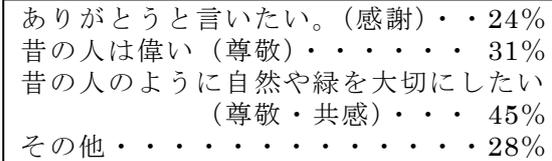
自分の生活を振り返ったあと、心のノートの関連ページ「ありがとうをさがそう」を活用した。そのことにより、地域の人など多くの人へのありがとうに気付くことができた。

身近な人、保護者など → 自分たちの周りで、生活を支えてくれている多くの地域の人々

中学年「花と緑のまち」の実践より

(対象 4 年生 50 名)

・深める発問におけるワークシート



事前に書いた、心のノートの詩『朝がくると』の感想に、「ものを大切にしたい」とか「知らなかった」など、多くの人に支えられているということにはあまり気付いていなかった児童が、本時では

「**お礼を言いたい**」「**強い願いにこたえたい**」などと感謝の思いを書いていた。

また、尊敬や感謝の念とともに「緑を守りたい」という記述があった児童が約半数を占め、実践意欲が示されていた。

・広げる発問における児童の発言

それぞれが自分の生活を振り返り、地域に残された石碑、家の近くの桜、近くの公園の緑などを思い起こしていた。身近なところで地域の人に支えられているということに気付くことができた。

高学年「消防団員の鈴木さん」の実践より

(対象 5 年生 27 名)

・深める発問における役割演技の反応

A いつもありがとうございます。
 B がんばってね。応援しているよ。
 支えられているという心情を実感するような発言がみられた。

・広げる発問における心のノートの活用

『支えてくれる人の思いを感じよう、その思いにこたえよう』の記述

あいさつをする
 お礼を言う
 助けてもらったら「ありがとう」と言う
 困っている人を助けたい
 下級生と仲良くする、ユニセフに協力する
 リサイクルをする、ゴミを捨てる など

感謝の気持ちから自分なりにできることはないかとよく考えていた。

考察

地域の人々の思いや願い、努力などが込められた資料を用いて学習することを通して、児童は主人公の心の動きから、尊敬や感謝の念に気付くことができた。

そして、その感謝の気持ちに共感して考えることにより、自分にも何かできることはないかという実践意欲が生まれてくることが確かめられた。

地域の人とのかかわりに目を向けさせることは、自分を取り巻く身近な社会を意識することにつながり、その中でどう生きようかと考える方向付けになったと思われる。

Ⅳ 今後の課題

1 他教科・領域との関連について

価値の自覚を深め、さらに尊敬・感謝の気持ちをはぐくむために、他教科・領域における指導との関連を図ったり、いくつかの内容項目と関連付けて指導したりしていく。

2 資料について

尊敬・感謝の内容項目において、私もこんな「生き方」をしたいと児童が思うような資料を発掘したり開発したりしていく。

(補助資料 1)

先行調査研究結果

平成 12 年度教育研究員 教育課題 報告書より



多くの項目で、「意識」の割合は高いが、「行動」の割合は低い。このことから、児童・生徒の「意識」と「行動」は必ずしも結び付いていないととらえることができる。

(補助資料 2)

学習指導案例① 「ごほうび」(文部省 道徳教育指導資料2) 低学年2-(4)

※主題に迫る工夫①

ねらい 日ごろ自分たちの世話をしてくれる地域の人々に気付き、感謝する気持ちを育てる。

展開

	学習活動(主な発問と予想される児童の反応)	指導上の留意点
導入	1 身近な人に支えられていることについて思い起こす。 ○学校や近所の人たちから何かしてもらったことはありますか。その時どんな気持ちでしたか。 ・主事さんが外に出たボールを拾ってくれてよかった。 ・近所の人が「行ってらっしゃい。」と声をかけてくれた。	○価値へ方向付ける導入をする。
展開	2 資料「ごほうび」(紙芝居)を視聴し、ゆきおの気持ちを話し合う。 ①おばさんに「明日も元気な顔を見せてね。」と言われて判を押してもらったゆきおはどんなことを考えたでしょう。 ・明日も頑張るぞ。・ぼくに手伝えることはないかな。 ②ゆきおは、おばさんの手伝いをしながらどんなことを考えたでしょう。 ・毎朝おばさんはこんなことをしてくれていたんだ。大変だ。 ・毎日お手伝いをして何だか楽しいな。明日も頑張ろう。 ・いつもありがとうございます。 ◎③ラジオ体操が終わり、おばさんに何かしてあげたいなと思ったゆきおになって、おばさんに手紙を書きましょう。 ・お手伝いができてうれしかったです。来年も、お願いします。 ・おばさん大変だったでしょう。来年もお手伝いしたいです。ありがとうございました。	○児童を集め臨場感をもたせて提示し、主人公「ゆきお」の気持ちを考えながら聞くように伝える。 ○「うれしい」気持ちから「ありがとう」の気持ちがわくことを押さえる。 ※主題に迫る工夫② 主人公「ゆきお」になって手紙を書き、感謝の気持ちを共感できるようにする。
	3 自分の生活を振り返る。 ○身の回りの「ありがとう」を探してみましよう。 ・交番のおまわりさん、安全を守ってくれてありがとうございます。 ・病院の先生は病気を治してくれます。ありがとうございます。 ・先生、勉強を教えてくださいありがとうございます。 ・いつも世話をしてくれてありがとうございます。	※主題に迫る工夫③ 心のノート42.43ページの「ありがとうをさがそう」を見て生活を振り返り、感謝の対象を広げる。
終末	4 教師の体験談を聞く。	

評価 ・自分たちの生活を支えてくれている人に気付き、感謝の対象が広がったか。
 ・ゆきおの気持ちに共感し、手紙に感謝の気持ちを書くことができたか。

「ごほうび」低学年 深める発問におけるワークシートについて



ゆきおより

「ごほうび」
二年組
名前()

○ ゆきおになって、おばさんに手紙を書きましょう。
おばさんへ

ク 深める発問をワー
シ ー ト に 書 いて、
ー ト に つ い て 考
え たら い か、見 て 考
え ぐ 分 かる よう に す
る。

児童が、一層共感できる
ようにするため、手紙の
形式にして、受け取り、主
人公の名前を入れておいた
イラストを入れる。

学習指導事例② 「花と緑のまち」(東京都道徳教育郷土資料集 第一集) 中学年2-(4)
 ねらい 地域の人々や高齢者が自分たちの生活を支えてくれることに気づき、尊敬や感謝の気持ちをもって接しようとする心情を育てる。

展開

	学習活動(主な発問と予想される児童の反応)	指導上の留意点
導入	1 身近な人々に支えられていることについて思い起こす。 ○いつもお世話になって「ありがたいな」と思っていることはありませんか。 ・地域のおじいさんがいつも声をかけて見守ってくれます。 ・野球のコーチがいろいろなことを教えてくれます。	○ねらいとする価値へ方向付ける導入をする。
展開	2 資料「花と緑のまち」を読んで、話し合う。 ①まゆみとはるこは学校の帰り道、桜の花を見てどんな気持ちだったでしょう。 ・なんてきれいな桜だ。 ・だれが、こんなにたくさん植えたんだろう。 ②桜の木の根元に建てられた石碑を見て二人はどんなことを考えたでしょう。 ・どうしてこんなところに石碑があるんだろう。 ・桜の木と関係があるのかな。 ・この言葉は、どんな意味があるのだろう。 ◎③おばあさんの話から、石碑には昔の人の願いが込められているということを知って二人はどんなことを考えたでしょう。 ・おばあさんたちのおかげだったなんて知らなかった。 ・自分たちの気付かないところで、いろいろな近所の人たちにお世話になっているんだな。 ・おじいさんやおばあさんは偉いな。ありがとうございます。	○桜の木が主人公にとって身近なものであり人々を楽しませている存在であることを押さえる。 ○石碑に気づき、詳しいことを知る老人から聞いたその由来について押さえて、中心発問につなげる
終末	3 自分の生活を振り返る。 ○地域の人々の努力や苦勞でつくられたものはありますか。そこにはどんな願いが込められているでしょう。 ・地域に昔の水道の石碑があった。みんなのために苦勞して作ってくれたんだと思った。 ・公園に説明が書いてあった。古くから残る塔を保存して自分たちの町をいつまでも大切にしていると思った。	※主題に迫る工夫② ワークシートに書くことで二人の気持ちに十分に共感させるとともに、評価にも役立てる。 ※主題に迫る工夫③ 心のノート49ページ「わたしの「ありがとう」」の感想を紹介し感謝の気持ちを広げる。
評価	4 教師の体験談を聞く。	

・地域の人々や高齢者に、感謝の念をもって接しようとする心情が育ったか。
 ・二人の気持ちに共感し、ワークシートに感謝の気持ちを書くことができたか。

「花と緑のまち」 中学年 深める発問におけるワークシートについて

「花と緑のまち」
 四年二組 名前()
 ○石碑には昔の人の願いがこめられているとい
 うことを聞いて、二人はどんなことを考え
 たでしょう。

深める発言で、何に
 ついて考えさせた
 いかを、ワークシ
 ートに明記し、考えや
 すくにする。

絵の表情に気を付けて、児童の思考が左右されないように配慮する。雰囲気合った挿絵を用いて、登場人物の心情により共感できるようにする。

学習指導事例③ 「消防団員の鈴木さん」 (自作資料) 高学年2-(5)

ねらい 地域の多くの人々が私たちの生活を支えてくれることを理解し、感謝の気持ちを持ち自分のできることはないか考えて行動しようとする態度を育てる。

展開

	学習活動 (主な発問と予想される児童の反応)	指導上の留意点
導入	1 毎日の生活を支えてくれる人について思い起こす。 ○毎日の生活の中で、どんな人に、どんなことでお世話になっているでしょうか。 ・給食主事さんはいつもおいしい給食を作ってくれます。 ・学童養護主事さんは交通安全を守ってくれています。	○心のノート56ページに記入して発表させねらいへの方向付けを図る。
展開	2 資料「消防団員の鈴木さん」を読んで、話し合う。 ①廊下に出て家の方を見ながら「ぼく」はどんなことを考えていたでしょう。 ・どこが火事なんだ。ぼくの家だったらどうしよう。 ・大丈夫かな。けが人がでないといいな。 ②お父さんから消防団の人たちの訓練の様子や苦労話を聞いて、「ぼく」はどんなことを考えたでしょう。 ・知らなかった。・仕事をしながら練習するなんて大変だろうな。 ・けが人の手当てやお年寄りの安全を守ってくれていたんだ。 ・すごいな。みんなのためにこんなことまでしているんだ。 ③次に鈴木さんに会ったら、「ぼく」はどんなことを話したでしょう。 ・鈴木さんいつもありがとうございます。 ・鈴木さんの苦労がよく分かりました。 ・ぼくにも何かできることはないかと思います。	○心配する「ぼく」の気持ちを押さえておく。 ※主題に迫る工夫② 時間を十分とり、鈴木さんが地域のために活動する際の苦労や思いに気付かせ、中心発問につなげる。 二人組で役割演技を行い、途中で役割交替しながら実際に全員に考えさせる。
終末	3 自分の生活を振り返る。 ○毎日の生活を支えてくれている人たちの思いにこたえて、あなたはどんなことができるでしょうか。 ・まちをきれいにしよう。・遊具を使いやすいように片付けよう。 ・小さい子の世話をしよう。・主事さんのお手伝いをしよう。 4 心のノートを読む。	※主題に迫る工夫③ 心のノート 56.57 ページに書き込み、振り返るようにする。

評価 ・生活を支えてくれる人に感謝し、自分のできることはないかと考えていたか。
 ・ぼくの気持ちに共感し、ワークシートに感謝の気持ちを書くことができたか。

(補助資料 3)

消防団員の鈴木さん 五年 21(5) 尊敬・感謝

「家族そろって夕ご飯を食べていたとき、
「ねえ、鈴木洋品店のおじさんがね、今日学校に来て総合的な学習
の時間に話をしてくれたんだよ。」

と、弟のたかしが言った。
「鈴木さんがどんなことをお話してくれたの？」

とぼくが聞くと、たかしは、
「鈴木さんはね、洋服を作る仕事をしながら消防団員として活動し
ているんだって。それで、この前うちの近くの家で火事があった
でしょ。その時に、その家のとなりに住む鈴木さんが、消防署に
知らせたりむすこさんといっしょに消火器を使って火を消した
りしてくれてたんだって。」

と話し始めた。
この話を聞いてぼくは、あの時の火事のことを思い出した。

「昼休み、ぼくたちは校庭で遊んでいた。」

「何かこげくさくない？」

と誰かが言ったときには黒い煙が風に乗って校庭まで流れてきた。
「どうしたんだらう」と思っていたら、しばらくすると消防車のサ
イレンが近づいてきては何台も通り過ぎていく音が聞こえた。

「火事の現場は近いのかな、どうも、うちの方だぞ、大丈夫かな」

と不安になった。ぼくは、何だか落ち着かず、何度も水飲み場に行
ったりトイレに行ったりして家の方ばかり見ていた。心の中で「ぼ
くのうちが火事だったらどうしよう、お母さんが無事でいますよ
う」

とくりかえしていた。学校が終わったら急いで家に帰った。

「あの時の火事は、ろう電が原因だったらしいね。家の人は旅行中
で、だれもいないところで火事がおこったみたい。鈴木さんが気
づいてくれなかったら、うちまで火がまわってきたかもしれなか
ったね。」

とお母さんが言った。たかしが、

「鈴木さんはね、『こげくさいぞ、どうしたんだらう』と思っ
て見たら、となりの家から火が出ているのに気がついたんだっ
て。急いで近所の人たちに向かって大声で『火事だ！』って知ら
せたり行って。そして、消防署に電話。道路に設置してある消火
器を取りに行って、家においてある消火器も使って、むすこさん
と二人で火を消したんだって。」

「あの角に置いてある消火器なら学校の帰りに見かけたことがあ
る。あの、赤い箱に入っているのでしょ。」

「うん。けっこういろんな所に消火器が置いてあるよね。それでそ
の消火器で火を消していた時、自分の家までけっこう離れている
のに、壁の内側がすごく熱くなってさわれないぐらいだったんだ
って。そして、やっとなんと消えたと思っただけなのに、ボンって音がしてま
た燃え出したんだって。火事ってこわいな。」

と興奮して話した。それを聞いてぼくも「火事ってこわいなあ」と
あらためて思った。そしてふとまたあの日のことを思い出した。
「そういえば、あの日、主事室におばあさんがいたんだ。何でかな、
と思っただけ、あのおばあさんは、鈴木さんが連れてきてくれた
のかな。」

と聞いた。すると、
「そうだな。鈴木さんは、近くに住むお年寄りを知っているから、
緊急の避難場所である学校に、そのお年寄りを連れてきてくれた
んだらう。」

とお父さんが話し始めた。
「消防団員っていうのは、いつもは他の仕事をしている地域の人た
ちが、時間を合わせて集まって訓練し、災害にそなえてくれている
んだ。お年寄りや子どもを守るといいうのもそうだし、けが人や
急病人を助けることもある。消防車が現場に早く到着できるように
に、交通整理もする。家を火事や災害で失ってしまった人に、ご
飯をたいておにぎりなどの食べ物を用意することもあるんだ。」

と教えてくれた。それを聞いて、
「鈴木さんもそう言ってたよ。仕事をしながら訓練するのはけっこ
う大変だけど、生まれてから今までずっとこの町に住んでいるか
ら、町や町の人を守るために、と思っただけでがんばっているんだ
って。」

とたかしが答えた。
ぼくは、たかしやお父さんの話を聞いて、町のためにこんなこと
をしてくれる人がいるってことを初めて知った。そして、この前「自
分の家が火事でなくてよかった」と思っていたのが少しはざしく
なった。

「ぼく、今度鈴木さんに消防少年団のことを教えてもらうんだ。」

というたかしの言葉を聞いて、

「よし、ぼくも今度、鈴木さんに会ったらあいさつしてみよう、そ
して、消防少年団について、話を聞いてみよう。『そんなこと
を考へながら、ぼくは、鈴木さんと話している自分のことを思いう
かべていた。」